

日本エッセイスト・クラブ

2023 秋

NO.75-I

会報

第71回クラブ賞受賞作



第71回 日本エッセイスト・クラブ賞

第45回 講談社 本田靖春ノンフィクション賞

第54回 大宅壮一ノンフィクション賞

受賞

撮影 滝田三子

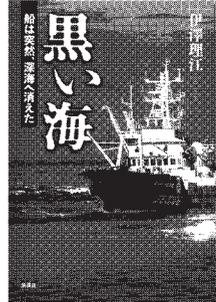


KODANSHA

伊澤理江

黒い海

船は突然、深海へ消えた



全長50メートルの漁船は、沈みようがない状況でなぜ沈んだのか？
なぜ杜撰な事故調査報告書が作成されたのか？
調査報道と謎解きミステリーが組み合わさった、衝撃の読後感！

大重版出来！

定価1980円(税込)

講談社 〒112-8001
東京都文京区音羽 2-12-21



親愛なるレニー

レナード・バーンスタインと
戦後日本の物語 吉原真里 著

定価：本体2500円〔税別〕 四六判・上製・448頁 ISBN 978-4-86559-265-8
ブックデザイン：木下 悠／カバー装画：ナガノチサト

芸術と愛に生きた巨匠バーンスタインの 実像にせまる感動のノンフィクション！

ワシントンの図書館で偶然に見出された、二人の日本人からの数百通の手紙たち。
バーンスタインと「カズコ」と「クニ」。知られざる愛の物語が、いま始まる。

堂々
5刷!!

各界から絶賛！ 第71回 日本エッセイストクラブ賞

第11回 河合隼雄 物語賞 第35回 ミュージックペンクラブ音楽賞

目次

日本エッセイスト・クラブ

会報

2023 秋

題字 阿部 眞之助
カット よしだみどり

第71回日本エッセイスト・クラブ賞 クラブ賞贈呈式	2
審査委員長報告	委員長 秋岡 伸彦 3
受賞作の紹介	委員 海老沢小百合 5
受賞の言葉	委員 松本 仁一 8
「小さな声」にこそ伝えるべき大切な ものがある	伊澤 理江 11
「エッセイスト」たちの肩に乗る	吉原 真里 16
クラブ賞贈呈式の祝宴 クラブ賞一覧	24
会員近況	26
2023年度定期総会 会長就任挨拶	大村 智 38
事務局から	40
日本エッセイスト・クラブ定款	44
会員名	46

2023年 第71回 日本エッセイスト・クラブ賞



『黒い海 船は突然、深海へ消えた』

講談社

伊澤理江

ジャーナリスト



『親愛なるレニー レナード・

バーンスタインと戦後日本の物語』

アルテスパブリッシング

吉原真里

アメリカ文化研究者、ハワイ大学教授

第71回日本エッセイスト・クラブ賞は、6月26日、東京・内

幸町の日本記者クラブ内で贈呈

式が行われ、上記2作品に賞状、

賞金（各30万円）が贈られた。

贈呈式では、秋岡伸彦審査委

員長の審査報告、海老沢小百合

審査委員、松本仁一審査委員の

受賞作紹介が行われた。

続いて、伊澤理江氏がオンラ

インで、吉原真里氏が壇上で受

賞の喜びを語り、会員、関係者

ら出席した約70人から祝福の拍

手を浴びた。

1953年（昭和28）に発足

したクラブ賞の受賞者は、これ

で194人となった。

第71回クラブ賞贈呈式

審査報告

いかに事実と向き合っか

審査委員長 秋岡 伸彦

日本エッセイスト・クラブ賞は、1952年（昭和27）創設以来の歴史を重ねて、第71回目を迎えました。

審査報告を行います。応募作品は計109点でした。内訳は、会員22名の推薦30点、出版社23社推薦の70点、個人応募9点です。

うち編著、復刻など審査基準から外れたものを除外して、対象を69点に絞りました。そのすべてを各委員が精読し、計3回の審査で次の7作品が最終候補に残りました。

吉原真里さん『親愛なるレニー』

高宮利行さん『西洋書物史への扉』



円満字二郎さん『漢字の動物苑』

揖斐高さん『江戸漢詩の情景―風雅と日常』

山本幸司さん『死者を巡る「想い」の歴史』

伊澤理江さん『黒い海』

井上篤夫さん『フルベッキ伝』

そして、5月30日の最終審査で、委員多数の

支持で『黒い海』と『親愛なるレニー』の2作

品の授賞が決まりました。

書名のサブタイトル、副題は、前者が『船は

突然、深海へ消えた』、後者が『レナード・バー

ンスタインと戦後日本の物語』です。ともに、

綿密な取材・調査、豊かな表現、読者を引き込

む構成、そのすべてで高く評価されました。

わがクラブ賞は、審査基準で対象を、随想、

評論からノンフィクション、研究などにまで広

げています。とはいえ、ノンフィクションない

しノンフィクション系の2作品が並んで授賞す

るのは初めてです。

2作品は、ともに刺激的な内容をはらんでい

ます。一部委員から、『黒い海』には推論の根拠

に、『親愛なるレニー』には私信の公開に、それ

ぞれ懸念が示されましたが、全体としての作品

の評価が覆ることはありませんでした。

優れたノンフィクションとは、調査や表現の

力量に加えて、積み上げた事実が作者がいかに

向き合うか、何を思うか。授賞2作品がそうで

あったように、エッセイの名を冠した当クラブ

賞では、とりわけ作者の存在感が問われるよう

に思います。

なお、『黒い海』は、先に大宅壮一ノンフィク

ション賞(日本文学振興会)を受賞されました。

その授賞発表時、当クラブ賞審査はすでに最終

段階にあり、そのまま同時授賞としました。か

つて当クラブ賞創設を唱えたのは大宅氏だった

という縁を付言しておきます。

審査委員

委員長 秋岡 伸彦

委員 秋山 秀一 海老沢小百合

高村 壽一 内藤 啓子

降幡 賢一 堀尾眞紀子

松本 仁一 よしだみどり

吉野源太郎

受賞作の紹介

世界のどこかに

真実を知っている人間はいるはずだ

伊澤理江著 『黒い海 船は突然、深海へ消えた』

審査委員 海老沢 小百合

作家の阿刀田高さんは、かつて直木賞の選考委員をされていたが、なぜ、自分は選考委員なのか—との答えとして、

「自分にはこれは書けないという判断と、これらの才能を発見するという未来志向を持つことが、私の立場だと念じ続けて審査している」と語っておられた。とても足元にも及ばないが、審査委員をお引き受けして以来、私はこの言葉を指針にして読ませて頂いている。

『黒い海』の内容は、サブタイトルと帯に書かれたコピーが実に簡潔、しかも饒舌に語り尽く

しているのです、そのまま引用する。

【日本の重大海難史上、まれに見る未解決事件。

その驚くべき「真実」。

2008年、太平洋上で碇泊中の中型漁船が突如として沈没、十七名もの犠牲者を出した。沈みようがない状況でなぜ悲劇は起こったのか？

ジャーナリストが海のミステリーに挑む。

なぜ証言は無視されたのか。

事故調査報告書の内容が真実でないとした

ら？

私は突き動かされるように、ひとりその闇を歩き始めた―」

「黒い海」の黒は、沈んだ漁船から出たおびただしい重油のこと。かつて今村昌平監督の映画（原作は井伏鱒二）「黒い雨」を連想してしまうが、あの黒は原爆投下後に降った、放射性物質を含んだ、重油のような粘り気のある大粒の雨を指していた。この本でも「黒」が重要なカギになっている。

著者は当初「私にとって漁業は遠い世界だった」と語る。しかし、ふとしたきっかけで、2008年の、この海難事故を知り、救助された



三名をはじめ、関係者の証言を元に、可能な限り資料を集め分析確認していく行程は圧巻だ。

冒頭は息をのむような再現シーンから始まる。その臨場感に引き込まれるが、その後の人物像の描き方も見事だ。ナゾを、ひとつ解明するごとに深まる闇に、立ち往生しながらも、筆者は勇気をもって自身の視座を求め続ける。

やがてその姿は、沈んだ巻き網漁船、第58寿和丸の船主であり、福島県漁連会長の野崎哲さんの人間性と共振しながら、人の生き方そのものを炙り出す。

野崎さんは、この海難事故の後、東日本大震災、さらに原発事故、放射能との闘いに直面し、立ち上がるうとするたびに次々と襲い掛かる難事を前にして、まさに不条理としか思えなかつたと語る。そして彼は「水俣と福島は似ている」という思いを強くするようになる。

彼が支えとしてきたと語る『苦海浄土』の作者・石牟礼道子さんの「花を奉る」という詩が、本文に挿入されているが、石牟礼さんは「震災後、がれきの中で、折れて傷ついた小さな野の花が、下を向いたまま咲いているのを見て、こ

の詩がうまれました」と語っておられたそうだ。

『苦海浄土』やこの詩の引用が、『黒い海』の作品自体を単なる告発から、もがき苦しむ関係者の救いや光となって伝わってくるようになる。

「古い事故をなぜ蒸し返すのか」とか「新事実がないと書けないのでは？」という周囲の声に対して著者は「解決には至らない案件を、あえてこの段階で提示することの背景には、寿和丸の事故や福島原発事故にまつわる不条理の数々、そうしたものをきちんと刻んでおいてほしい」という当事者の願いに、つき動かされるからだ」と語る。

そして「例え、公的な記録から外れていても、関係者の声に耳を傾け、事実を丹念に拾ってあげば、記録に残す価値があるものは、はっきりとした輪郭を伴って浮かび上がってくる」という信念にたどり着く。

石牟礼道子さんの代表作『苦海浄土』のあとがき、冒頭に

へ一九六九年、熊本において【水俣病を告発する会】が発足した。代表になっていただいた高校教師本田啓吉先生がおっしゃった言葉を今に忘

れない。「我々は一切のイデオロギーを抜きにして、ただ、義によって助太刀致します」 石牟礼さん自身も『苦海浄土』はまさにこれと同じ気持ち「義によって助太刀いたす」という思いで書きました」と述べられているが、この本田啓吉先生は私の高校時代の恩師である。

憧れの志望校に入れて、さあ、花の女子高生。浮かれて受けた最初の現代国語の授業中、立たされて叱責を受けた苦しい思い出が蘇る。立っている理由が分からないまま、答えを出し続けてもお許しは出ず、翌日も私が立ったところから、授業再開。ただ言われ続けたのは「自分に問いかけろ。君自身の言葉で語れ」。

今回、久々にあの時の、本田先生の静かで野太い声がブーメランのように舞い戻ってきた。人生は巡り巡って、ひとしづくの甘露と、思いがけない展開をもたらすものだとしみじみ思う。

『黒い海』のあとがきにも、鳥肌がたつような巡り合わせが書かれている。

伊澤さんも「義によって助太刀いたす」という思いで書かれたのではないだろうか。今後の活躍にエールをお送りしたい。

受賞作の紹介

「巨匠」と「ファン」の誠実なやりとり

吉原真里著 『親愛なるレニー』

レナード・バーンスタインと戦後日本の物語

審査委員 松本 仁一

レナード・バーンスタインといえば米国の誇る世界的な指揮者です。

著者は、アメリカ議会図書館に保管されている彼あての手紙を調べていて、たまたま2人の日本人の名前を見つけました。天野和子と橋本邦彦。

フランスでピアノを学んだ天野は、戦後すぐの1947年、バーンスタインが音楽雑誌に寄せたエッセイを読んで感動し、ファンレターを送り始めます。同世代の異性に対する感情も、

多分に込めながら。

手紙の書き出しは、最初は「ディア・サー」であり「バーンスタイン指揮者様」でした。それがやがて「親愛なるレニー」に変わっていきます。

天野が送った手紙はフォルダーに三つ分ありました。これはバーンスタインの妻が夫あてに書いた手紙の量に匹敵します。

一方、橋本は79年、4回目の日本公演にやってきたバーンスタインと、同性愛者としての一

夜を過ごしました。橋本は、その翌日から恋人・バーンスタインへの手紙を書き始めます。こちらが最初から熱烈なラブレターでした。手紙を投函した日にまた手紙を書くといった具合の、恋に落ちた者の激しさです。

橋本の手紙は、本書によると「何十ものフォルダーを収納した箱が丸二箱分以上」という大変な分量でした。

著者は6年かけてその膨大な量の手書きの手紙を読み込みます。審査委員の間からも「よくこれだけ丹念に読んだものだ」と感嘆の声が上がりました。



強く印象に残ったのは、敗戦直後の日本に、バーンスタインの音楽をきちんと評価し、それを英語で綴って手紙を書く男女がいたということです。そして同時に、世界的な巨匠が、それを適当にあしらうのではなく、誠実に対応していたということでした。

著者は、巨匠とファンの、そんな生き生きとしたやりとりをみごとに掘り起こしました。

1979年の日本公演の直前、天野の夫が病気で明日をも知れぬ状態となりました。宿泊先のホテルオークラのロビーで、訪れた天野からそのことを聞いたバーンスタインは彼女を抱きしめ、ロビー中に響くような声で号泣するのでした。

一方、バーンスタインは橋本に日本の事務所を任せます。さらには天野に橋本の存在を告げ、協力を求めました。1985年、2人は渋谷で会って新しい仕事に踏み出します。バーンスタインは2人と、単なるスターとファンとしての関係だけでなく、対等の人間同士の関係をつくっていました。

著者はバーンスタインがメディアに語ったこ

んな言葉を見つけ出しています。

「私はふたつのものをとりわけ愛しています。音楽、そして人間です。どちらをより愛しているかはわかりません。…人を愛することと、音楽を愛すること、それは私にとって同じことなのです」

ところで天野も橋本も、こうした手紙を他者に読まれることは想定していませんでした。

そのため読み進めるにつれ、恋人たちの部屋を覗き見しているような後ろめたさを感じることもありました。にもかかわらずこの本が感動を与えるのは、世界の大指揮者と2人の日本人の、人間としての真剣な愛情・友情が生き生きと描かれているためだと思います。

橋本は日本事務所を辞め、オーストラリアに移住します。著者は米国在住なのですが、2017年にシドニーを訪れて橋本に会い、出版の了解を得ます。

一方、この本の執筆時、著者は東京で娘さんと暮らす89歳の天野にも会い、「レニーのためなら」と手紙の公開を了承されます。

「覗き見の後ろめたさ」はこれにて解消。そう

考えていいのではないのでしょうか。



「小さな声」にこそ伝えるべき
大切なものがある

伊い澤ざ理り江え

70年以上の歴史ある「日本エッセイスト・クラブ賞」をいただき、選考に関わってくださいました全ての皆様に心よりお礼を申し上げます。選考対象となるジャンルも幅広く、まさか拙著が選ばれるとは思いませんでした。

「黒い海」は、今からちょうど15年前の6月に、千葉沖で沈没した、漁船「第58寿和丸」を題材としたものです。寿和丸は20人を乗せた漁船で、カツオやマグロを追って長い航海に出ていました。そのときに事故に遭遇します。

正午すぎ、最も安全とされる方法を使い、太





遠藤前会長から賞状を受ける代理の講談社青木肇氏

平洋上で船を休ませていました。そこに突然、寿和丸は二度の衝撃を受け、あつという間に転覆。海に投げ出された方々もいましたが、多くは船内に閉じ込められたまま、脱出する間もなかったようです。船体は1時間ほどで沈没し、17人の命が海に消えました。生還者はたった3

人です。

現場には広範囲にわたり、ドロっとした真っ黒な油が海を覆っていたと言います。事故当初から、何らかの衝撃により燃料油が積まれた寿和丸の船底が破損し、それが原因となって転覆・沈没したとの見方がありました。大量の燃料油が漏れ出た、それが船体が壊された証だと言われていました。

しかし、国の調査結果は、思わぬ内容でした。事故から3年後、東日本大震災の混乱の最中に、国の運輸安全委員会が公表した調査報告書では「原因は大波」だったのです。これに疑問を持った人たちは、「国に逆らうのか」とばかり、軽んじられ、排除もされました。やがて彼らの声は埋もれ、事故のことは我々の記憶から薄れていったのです。

私が寿和丸の取材を始めたのは2019年です。事故発生から11年後のことです。全くの偶然でこの事故のことを知り、「寿和丸はなぜ沈んだのか？」という謎解きにすっかりのめり込みました。

3人の生還者に事故の状況をインタビュー取材していくと、報告書の内容と全く違ってしまう。一番近くで事故を見た3人の証言と、報告書の内容が大きく食い違っている。どう考えて

略歴

1979年生まれ。英国ウエストミンスター大学大学院ジャーナリズム学科修士課程修了。英国の新聞社、PR会社などを経て、フリージャーナリストに。調査報道グループ「フロントラインプレス」所属。これまでに「20年前の『想定外』 東海村JCO臨界事故の教訓は生かされたのか」「連載・子育て困難社会 母親たちの現実」をYahoo!ニュース特集で発表するなど、主にウエブメディアでルポやノンフィクションを執筆してきた。東京都立大学メディア情報学部「メディアの最前線」、東洋大学経営学部「ソーシャルビジネス実習講義」等で教壇にも立つ。初の著書となる本作で、大宅壮一ノンフィクション賞、講談社本田靖春ノンフィクション賞を受賞。

も不可解でした。寿和丸は波で沈んだとは思えないのです。

生還者の一人に初めて会った時、彼は憤りながら勢いよく語り始めました。私が質問を始めるより前に、です。聞いていくと、彼は言うわけです。「当時、国に自身の証言をともに聞いてもらえなかった」と。

事故から10年以上も経っているのに、彼の記憶は鮮明でした。不可解な調査結果が出され、幕引きされ、納得できないという思いの中で、何度も何度もあの時のことを反芻し、長い年月を経てきたのだろうと想像できました。本当に悔しかったのだと思います。

私の取材は、そうした事故当事者の声に突き動かされるように進みました。報告書の矛盾を突き詰め、本当の原因を探ろうとする過程で見えてきたのは、真実の追究よりも辻褃合わせでよしとする調査機関の官僚的体質、そして軍事機密の高い壁でした。

一方で事故の当事者らは「国」の理不尽さを前に耐え忍ぶだけ……。その構図を知ったとき、

私はこの重大海難を不運な事故として埋もれさせることなく、何が覆い隠されていたのかを丹念に取材し、後世に残したいと考えるようになりました。

強い者の大きい声はよく通る。一方で、こちらから聞きに行かないと決して表に出てこない、かき消されそうな小さな声もあります。立場の弱い者の小さき声。そこにこそ、伝えるべき大切なものがあると私は思います。強き者による記録が全てではありません。

「黒い海」には、理不尽にただ耐え忍び、憤りや悔しさ、悲しみといった感情を押し殺しながら生きる人たちが何人も登場します。そうした、社会から見えない人々の存在、理不尽さ、絶望の最中にあっても、何とか前を向いて生きようとする人間の尊さ。そうしたものを私は描きたいと思いました。

本書の冒頭、トビラにはフランスの作家・カミュの言葉を引用しています。

「世界は人間の理性を超えている。ただそれだけのことなのだ」

その、理性を超えた不条理の中で生き続けているのが、本書の主人公でもある野崎哲さんです。野崎さんは、寿和丸を所有する船会社の社長さんです。

寿和丸の事故で17人の乗組員を失い、船も失いました。そして、3年後には東日本大震災。福島県いわき市にある社屋は津波に襲われ、計3隻の漁船も失いました。野崎さんはその後、福島原発の事故にも苦しめられます。事故はまだ終わっていません。トリチウムを含んだ処理水を海洋に放出する問題は、まだ議論が続いており、福島県漁連会長でもある野崎さんは、ずっと国や東京電力との交渉の矢面に立たされていくのです。

しかし、逃れようのない不条理の真っ只中にいる野崎さんは、希望を捨てていません。詳しくはこの本の終盤で記しました。「黒い海」は、野崎さんの苦悩と葛藤の記録でもあり、地元に着して生きる他はない、福島の漁業者たちの思いが詰まった1冊でもあります。

『黒い海』は、多くの方々を支えられて生まれ

た作品です。海にも船にも疎い私の取材に、何
度となく応じてくださった事故の関係者や専門
家の皆さん。読者目線を何よりも大切に、その
中でどう伝えていくか、一冊のノンフィクショ
ンを書くとはどういうことかを丁寧に教えてく
だされた講談社の青木肇編集長。フロントライ
ンプレスの代表・高田昌幸さんからは調査報道
の醍醐味を学び、「黒い海」でも伴走していただ
きました。そして何より、家族の理解と支えも
欠かせないものでした。

決して一人の力ではなく、ご協力くださった
全ての方々と共に頂いた日本エッセイスト・ク
ラブ賞です。本書に関わってくくださった方、ま
た関心を寄せてくださった全ての皆様に心より
感謝を申し上げます。



氏津伊の述懐書『黒い海』を受賞するオンライン

「エッセイスト」たちの肩に乗る

よしはら まり

吉原真里

このたびは、たいへん栄誉ある賞をいただき、本当にありがとうございます。

私はちょうど1ヶ月前、ハワイから羽田空港に着陸して、ゲートから入国審査に歩く途中に、携帯電話で受賞のお知らせをいただきました。

実家に到着して、関係者とガッツポーズのメールのやり取りをしてから、まず私がしたのは、「日本エッセイスト・クラブ賞」をググることでした。これを告白して賞を取り下げられたら困るのですが、エッセイスト・クラブ賞が歴史あるたいへん立派な賞であることは知っていたも



の、自分で『親愛なるレニー』が「エッセイ」であるとは考えたことがなかったので、この賞の精神や過去の受賞者を知りたかったのです。

そして私は、日本エッセイスト・クラブ賞は1952年に制定されたことを知りました。その年に、アメリカによる日本本土の占領が終わりました。同年にアメリカでは、それまでどれほど品行方正でせっせと労働に励み税金を納めてもアメリカ国籍を取得できなかった日本人を含むアジア移民が、アメリカに帰化することが可能になりました。冷戦という世界秩序のもとの日米同盟がどのようなものであったかは、伊澤さんのご本でも示唆されているとおりですが、そうした構造のなかで、「言論の自由を主張し、文化と平和に貢献することを目的として、国際文化団体との連携を期する」ために、日本エッセイスト・クラブが創設されたのです。

エッセイストの意味合いについては、狭義の随筆や随想だけにとらわれず、評論、ノンフィクションなど幅広い分野を対象にすること

です。私のおおざっぱな数えによると、過去の192の受賞作のなかで、海外の歴史や社会、文化を扱ったルポ、紀行文、評論などは39作、五分の一を占めています。アメリカに焦点を当てたもののなかには、私が孫弟子にあたる島田謹二先生の『アメリカにおける秋山真之』の次には、その島田謹二先生に指導を受けた、私の愛する恩師、亀井俊介先生の名著『サーカスが来た!』、その翌年には藤原正彦さんの『若き数学者のアメリカ』が続き、時代くだって2008年には堤未果さんの『ルポ 貧困大国アメリカ』が受賞しています。

ちなみに、192人の受賞者のうち女性は49人でした。四分の一です。(今日の伊澤さんと私の受賞によって、194人中51人となります。)多いとは言えないものの、1953年に第1回の受賞者を輩出した賞で、とりわけ女性作家の仕事に注目したり支援したりすることを前面に掲げてはいない賞としては、そしてとくに同類の他の賞と比較すると、まずまずの健闘と言えらるのではないでしょうか。

女性の受賞者のなかには、私がこよなく愛し、いつの日か私の本の表紙に作品を使わせていただけないかと妄想している、篠田桃紅さんもりらっしやいます。篠田さんもまた、日本とアメリカの歴史のなかで力強く生き、表現をしつづけたかたでした。2016年には国や国語、母国語を模索してきた温又柔さんも受賞されています。そして今日この場で一緒にいる伊澤理江さんの『黒い海』もまた、土に根差し海に生きる人々の言葉にしっかりと耳をかたむけ、その声をつなぐことで「国」のありかたを問う大作です。

こうして、いろいろな著者たちが、言葉や文化、社会、「国」と格闘しながら、さまざまなジャンルで日本語の文章を綴ってきた、その産物に真剣に向き合い、賞を与えてきた日本エッセイスト・クラブ、その営み自体が、とても貴重な「エッセイ」であるように思います。

『親愛なるレニー』のコーダでも書いたように、エッセイスト・クラブが創設された195

0年代に英語学習雑誌の文通欄を通じて知り合った両親から、私はニューヨークで生まれ、東京で育ち、アメリカ研究者としてハワイで人生の半分近くを過ごしてきました。私自身の人生が、戦後の日本とアメリカの関係性のなかで生まれ、展開してきたものです。

そして、その自分と世界の間を理解するため、そしていわば自分の人生に落とし前をつけようとして、私は日本語と英語の両方で執筆を続け、これまで何冊も本を書いてきました。それぞれがまったく違ったタイプの本で、どの本にも全力をかけてきたつもりです。でも今回の本ほど、調査と執筆の過程でさまざまな紆余曲折を経験したことはありませんでした。

今回の本は、冷戦期の日米の文化政策についての調査をしようと思って資料を集めていたときに、ワシントンの議会図書館で偶然出会った手紙がきっかけで、もとの研究計画を大きく旋回させて、その後6年間、執筆・推敲を重ね英語版を出し、そこからさらに3年間かけて日本

語版が世に出たものです。その道程で、ほんとうに多くの出会いがありました。

略歴

1968年ニューヨーク生まれ。東京大
学教養学部卒、米国ブラウン大学博士号
取得。ハワイ大学アメリカ研究学部教授。
専門はアメリカ文化史、アメリカ・アジア関係史、
ジェンダー研究など。著書に『アメリカの大学院
で成功する方法』『ドット・コム・ラヴァーズ――
ネットで出会うアメリカの女と男』（以上中公新
書）、『性愛英語の基礎知識』（新潮新書）、『ヴァン・
クライバーン国際ピアノ・コンクール――市民が
育む芸術イヴェント』『『アジア人』はいかにして
クラシック音楽家になったのか？――人種・ジェ
ンダー・文化資本』（以上アルテスパブリッシン
グ）、共編著に『現代アメリカのキーワード』（中
公新書）、共著に『私たちが声を上げるとき――ア
メリカを変えた10の問い』（集英社新書）、そのほ
か英文著書多数。

まず最初に、レナード・バーンスタインとい
う、とてつもなくスケールの大きな人物との出
会い。私は音楽愛好家としてもアメリカ研究者
としても、もちろんバーンスタインの重要性は
知っていましたが、なぜかそれ以上の積極的な
興味は持ったことがありませんでした。議会図
書館に所蔵された1700箱という気が遠くな
るようなコレクションやその他の資料を通し
て、バーンスタインの人生や仕事を知るなかで、
私はバーンスタインがまさに「愛のひと」であ
ったことを理解しました。そしてあらためて彼
の音楽に耳を傾けたりピアノ曲をさらったりす
るなかで、私はバーンスタインが音楽を通じて
表現しようとした、愛や渴望、笑いや悲しみ、
迷いや葛藤に浸りました。彗星のように輝く芸
術家であっただけでなく、世界の平和を真に希
求し、人類がそれを達成できるとの信念を失わ
なかったバーンスタイン。アメリカと日本、そ
して世界全体が前代未聞の危機に見舞われたこ
の10年間に、そのような存在と向き合ってきた
ことで、私はさまざまな局面で勇気をもらいま
した。



遠藤前会長から賞状を受ける吉原氏

そして次に、天野和子さんと橋本邦彦さんという、バーンスタインと深くかけがえのない愛情関係を築いた二人の日本人との出会い。はじめは丁寧な手書きで綴られた数々のお手紙の文面を通して、そしてのちにはご本人に実際にお会いしてやりとりを重ねるなかで、私は、見返

りを求めない真摯な愛、敬愛する対象に全力で奉仕しながらも自分を見失わない確固とした主体性、形を変えながら深まる関係性、そうした愛情が、物理的な距離や立場の違いやそれぞれの現実生活といった壁をこえて実際に存在することを知りました。そして、そのような個人の人生や愛情に向き合い、掘り下げ、本という形で世に伝えるにあたっては、研究者や著者としてのアジェンダや能力のほかに、そしてそれ以上に大切な、人間としての姿勢や資質が必要であることを、折に触れて感じました。私にとってこの本の執筆は、まさに人間としての力を試されるものであり、その過程で本当に多くのことを学びました。

また、バーンスタインの芸術や平和への想いを実現すべく、マエストロの存命中もその後の30年以上も、さまざまな形で尽力してきた人々とその仕事との出会いもありました。バーンスタインがとてつもない才能をもった芸術家であったことは間違いありませんが、芸術は個人の才能だけで社会に意味をもたらすことはできま

せん。バーンスタインの音楽を愛し、芸術の力を信じ、変わりゆく政治や経済や社会の仕組みをナビゲートしながら、音楽を生み出し、人をつなぎ、歴史を伝える営みに携わる人たちの誠意と寛大さにも、おおいに勇気づけられてきました。

そして、『親愛なるレニー』が刊行されてからも、私が想像していなかった形の出会いを数多く経験しています。バーンスタインや音楽をこよなく愛し、この本に登場するコンサートに足を運んだり録音を聴いたりして人生を送ってきたかたたちが、まさに天野さんや橋本さんがバーンスタインにしたように、私に手書きで手紙を送ってくださいったり、イベントに足を運んで思いを言葉で伝えてくださったり、ご自分のお仕事の結果を私と共有してくださったりしています。また、必ずしもバーンスタインやクラシック音楽に馴染みがない読者でも、この本の著述をとおして自らが生きてきた人生や社会を振り返るきっかけになってるようです。この本は多くの読者にとってまさに本のサブタイトル

にある「戦後日本の物語」なのだと感じています。そのように、読者が自らを見出し、レレバンスを感じられるような本を書くことができたのは、著者としてほんとうに幸せなことです。

芸術が個人の才能だけでは世に伝わらないのと同様、本も著者ひとりの力で生まれるものではありません。この本の誕生とその後の展開を経験して、私はそのことを今まで以上に痛感しています。

まず、たいせつな、プライベートな経験と物語を、私の筆に委ねてくださった、天野和子さんと橋本邦彦さんに、心から感謝申し上げます。その決断にどれだけの勇氣と信頼が必要であったかと想像するに、愛することは信じることだ、との思いを強くします。

そして、取材に応じてくださったり資料を提供してくださったたり、アーカイブの迷路をナビゲートしてくださったたり、取材旅行中にお世話になったり、草稿を読んでコメントをくださった

たり、あれこれの苦労話に共感をもって耳を傾けてくださったりと、リサーチの過程で直接・間接の協力をしてくださった多くのかたたちにも、足を向けては眠れません。

アルテスパブリッシングの木村元さんには、初期の段階から、この実にややこしい企画に根気よく誠実に取り組んでいただきました。温かく愛の溢れる本づくりをしてくださった装丁の木下悠さんとイラストのナガノチサトさんには、とても感謝しています。そしてこの本に関しては、アルテスのみなさんそして野崎洋子さんが、私がいままで経験したことのない熱いチーム体制で、営業や広報にあたってくださいています。思いを共にする人たちが力を合わせれば、いろんなことが可能になるだけでなく、単純に楽しい！ということを日々味わっています。

数多くの作品を読み込み、真剣に議論し、『親愛なるレニー』を選んでくださった、エッセイスト・クラブ賞の審査員のみなさま、本当にあ



受賞の言葉を述べる吉原氏

りがとうございます。

そして、たくさんの素晴らしい本が世の中に存在するなかで、審査員のかたたちに評価していただくためには、まずは本の存在を知っていただくなければいけません。さまざまな媒体で書評や記事を書いてくださったかたたち、ラジオや雑誌でインタビューをしてくださったかたたち、ポッドキャストやブログなどで本を取り上げてくださったかたたち、書店やその他のスペースでイベントを開催してくださったかたたちなど、この本をあれこれの形で応援してくださってきたみなさん、本当にどうもありがとうございます。これからも引き続き宣伝を続けていただくよう、お願いいたします。

この賞を励みに、今後も頑張って研究や執筆を続けていこうという元気をいただいています。詳細はまだ未公開ですが、現在、日本語と英語、日本とアメリカで生きてきた私の物語の本を準備中です。実はそちらのほうが、古典的な意味での「エッセイ」に近い形になっています。

すので、もしよろしければぜひ来年もこちらに呼んでいただければ、今日の経験を糧に、来年はより磨きのかかった受賞の言葉を披露させていただきます。

今日は本当にどうもありがとうございました。



クラブ賞贈呈式の祝宴





❀ 日本エッセイスト・クラブ賞一覧 ❀

第1回～第71回

	氏 名	書 名	発 行 所
第1回 1953年	市川謙一郎 吉田洋一 内田亨	一 日 一 言 数 学 の 影 絵 き つ つ き の 路	北 海 太 陽 社 東 和 社 東 和 社
第2回 1954年	島村喜久治 秋山ちえ子 須田栄	院 長 日 記 私のみたこと聞いたこと 千 夜 一 夜	筑 摩 書 房 N H K 放 送 東 京 新 聞 社
第3回 1955年	木下広居 片山広子	イギリスの議 燈 火 の 節	読 売 新 聞 社 暮 しの 手 帖 社
第4回 1956年	小林勇 清水一 藤田信勝	遠 い あ し 音 す ま い の 四 季 不 思 議 な 国 イギリス	文 藝 春 秋 暮 しの 手 帖 社 毎 日 新 聞 社
第5回 1957年	小熊捍 中西悟堂 森茉莉	桃 栗 三 年 野 鳥 と 生 き て 父 の 帽 子	内 田 老 鶴 圃 ダ ウ イ ッ ト 社 筑 摩 書 房
第6回 1958年	大牟羅良 佐々木祝雄 松村緑	も の い わ ぬ 農 民 三 十 八 度 線 薄 田 泣 董	岩 波 書 店 全 国 引 揚 孤 児 育 英 援 護 会 角 川 書 店
第7回 1959年	竹田米吉 曾宮一念 村川堅太郎	職 人 海 辺 の 熔 岩 地 中 海 か ら の 手 紙	工 作 社 創 文 社 毎 日 新 聞 社
第8回 1960年	高橋喜平 中尾佐助 萩原葉子	雪 国 動 物 記 秘 境 ブ ー タ ン 父 萩 原 朔 太 郎	明 玄 書 房 毎 日 新 聞 社 筑 摩 書 房
第9回 1961年	塚田泰三郎 宮本常一 庄野英二	和 時 計 日 本 の 離 島 ロ ッ テ ル ダ ム の 灯	東 峰 書 院 未 来 社 レ グ ホ ン 舎
第10回 1962年	小門勝二 小島亮一 大平千枝子	散 人 ヨ ー ロ ッ パ 手 帳 父 阿 部 次 郎	私 家 版 社 朝 日 新 聞 社 角 川 書 店
第11回 1963年	新保千代子 林良一 石井好子	室 生 犀 星 シ ル ク ロ ード 巴里の空の下オムレツの においは流れる	角 川 書 店 美 術 出 版 社 暮 しの 手 帖 社

	氏 名	書 名	発 行 所
第12回 1964年	片岡 弥吉 錦 三郎 関山 和夫	浦上四番崩れ 蜘蛛百態 説教と話芸	筑摩書房 赤光発行所 青蛙房
第13回 1965年	佐々木たづ 阪田 貞之 秋吉 茂	ロバータさあ歩きましょう 列車ダイヤの話 美女とネズミと神々の島	朝日新聞社 中央公論社 河出書房
第14回 1966年	白崎 秀雄 西山 卯三 阿部 孝	真 價 住み方の記 ばら色のばら	講談社 文藝春秋社 高知新聞社
第15回 1967年	宮本 又次 安住 敦 佐藤 達夫	関西と関東 春夏秋冬帖 植 物 誌	青蛙房 牧羊羊社 雪華社
第16回 1968年	団藤 重光 泉 靖一 畑 正憲	刑 法 紀 行 フィールド・ノート われら動物みな兄弟	創文社 新潮社 協同企画社
第17回 1969年	佐貫 亦男 戸井田道三 坂東三津五郎	引力とのたかひーとぶー きもの思想 戯 場 戯 語	法政大学出版局 毎日新聞社 中央公論社
第18回 1970年	仲田定之助 島田 謹二 芥川比呂志 菊池 誠	明治商売往来 アメリカにおける秋山真之 決められた以外のせりふ 情報人間の時代	青蛙房 朝日新聞社 新潮社 実業之日本社
第19回 1971年	池宮城秀意 大谷 晃一	沖縄に生きて 続関西名作の風土	サイマル出版社 創元社
第20回 1972年	堀 淳一 角川 源義	地 図 の た の し み 雉 子 の 聲	河出書房新社 東京美術
第21回 1973年	鳥羽 欽一郎 斎藤 真一 樋口 敬二	二つの顔の日本人 警 女 地球からの発想	中央公論社 日本放送出版協会 新潮社
第22回 1974年	上田 篤 川田 順造 早川良一郎	日本人とすまいら 曠野か けむりのゆくえ	岩波書店 筑摩書房 文化出版局
第23回 1975年	加古里子 木村尚三郎 児玉隆也 松本重治	遊 び の 四 季 ヨーロッパとの対話 一銭五厘たちの横丁 上海時代(上中下)	じゃこめてい出版 日本経済新聞社 晶文社 中央公論社

	氏 名	書 名	発 行 所
第24回 1976年	中野孝次 渡部昇一 高峰秀子	ブリューゲルへの旅 腐敗の時代 わたしの渡世日記	河出書房新社 文藝春秋 朝日新聞社
第25回 1977年	沢村貞子 杉本秀太郎 亀井俊介	私の浅草 洛中生息 サーカスが来た!	暮しの手帖社 みすず書房 東京大学出版会
第26回 1978年	野見山暁治 藤原正彦 長坂 覚	四百字のデッサン 若き数学者のアメリカ 隣の国で考えたこと	河出書房新社 新潮社 日本経済新聞社
第27回 1979年	篠田桃紅 斉藤広志 百目鬼恭三郎	墨いろ 外国人になった日本人 奇談の時代	P H P 研究所 サイマル出版会 朝日新聞社
第28回 1980年	三国一朗 太田愛人 小松恒夫	肩書きのない名刺 羊飼いの食卓 百姓入門記	自由現代社 築地書館 農山漁村文化協会
第29回 1981年	関 容子 古波蔵保好 両角良彦	日本の鶯 沖縄物語 1812年の雪	角川書店 新潮社 筑摩書房
第30回 1982年	足立巻一 伊藤光彦 岡田恵美子	虹 滅 記 ドイツとの対話 イラン人の心	朝日新聞社 毎日新聞社 日本放送出版協会
第31回 1983年	舟越保武 藤原作弥 志賀かう子	巨岩と花びら 聖母病院の友人たち 祖母、わたしの明治	筑摩書房 新潮社 北上書房
第32回 1984年	吉行和子 尾崎左永子 佐橋慶女	どこまで演れば気がすむの 源氏の恋文 おじいさんの台所	潮出版社 求龍堂 文藝春秋
第33回 1985年	関 千枝子 北小路 健 清水俊二	広島第二県女二年西組 古文書の面白さ 映画字幕五十年	筑摩書房 新潮社 早川書房
第34回 1986年	田村京子 豊田正子 中村伸郎	北洋船団女ドクター航海記 花の別れ おれのことなら放っというて	集英社 未来社 早川書房
第35回 1987年	金森久雄 堀尾真紀子 渡辺美佐子	男の選択 画家たちの原風景 ひとり旅一人芝居	日本経済新聞社 日本放送出版協会 講談社

	氏 名	書 名	発 行 所
第36回 1988年	北見 治 一 田中トモミ 山形 孝 夫	回 想 の 文 学 座 天 か ら の 贈 り 物 砂 漠 の 修 道 院	中 央 公 論 社 ア ド ア 出 版 社 新 潮
第37回 1989年	河 村 幹 夫 酒 井 寛 平 原 毅	シャーロック・ホームズの履歴書 花 森 安 治 の 仕 事 誌 英 国 大 使 の 博 物 誌	講 談 社 朝 日 新 聞 社 朝 日 新 聞 社
第38回 1990年	澤 口 た ま み 二 宮 正 之 山 川 静 夫	虫のつぶやき聞こえたよ 私の中のシャルトル 名 手 名 言	白 水 社 筑 摩 書 房 版 中 央 法 規 出 版
第39回 1991年	岩 城 宏 之 林 望 山 崎 章 郎	フィルハーモニーの風景 イギリスはおいしい 病院で死ぬということ	岩 波 書 店 平 凡 社 主 婦 の 友 社
第40回 1992年	加 藤 雅 彦 山 崎 柄 根 山 本 博 文	ド ナ ウ 河 紀 行 鹿 野 忠 雄 江 戸 お 留 守 居 役 の 日 記	岩 波 書 店 平 凡 社 読 売 新 聞 社
第41回 1993年	志 村 ふ く み 鈴 木 博 中 野 利 子	語 り か け る 花 熱 帯 の 風 と 人 と 父 中 野 好 夫 の こ と	人 文 書 院 新 宿 書 房 岩 波 書 店
第42回 1994年	伊 吹 和 子 岸 恵 子 中 山 士 朗	わ れ よ り ほ か に ベ ラ ル ー シ の 林 檜 原 爆 亭 折 ふ し	講 談 社 朝 日 新 聞 社 西 田 書 店
第43回 1995年	加 藤 恭 子 徐 京 植 星 野 慎 一	日 本 を 愛 し た 科 学 者 子 ど も の 涙 俳 句 の 国 際 性	ジ ャ パ ン タ イ ム ズ 柏 書 房 博 文 館 新 社
第44回 1996年	石 坂 昌 三 辻 由 美 柳 澤 桂 子	小 津 安 二 郎 と 茅 ヶ 崎 館 世 界 の 翻 訳 家 た ち 二 重 ら せ ん の 私	新 潮 社 新 評 論 房 早 川 書 房
第45回 1997年	中 丸 美 繪 松 本 仁 一 山 田 稔 加 藤 シ ゅ エ	嬉 遊 曲、鳴 り や ま ず ア フ リ カ で 寝 あ あ、そ う か ね 百 歳 人、加 藤 シ ゅ エ 生 き る	新 潮 社 朝 日 新 聞 社 京 都 新 聞 社 日 本 放 送 出 版 協 会
第46回 1998年	岸 田 今 日 子 小 林 和 男 細 川 俊 夫	妄 想 の 森 エルミタージュの緞帳 魂のランドスケープ	文 藝 春 秋 日 本 放 送 出 版 協 会 岩 波 書 店

	氏 名	書 名	発 行 所
第47回 1999年	小 塩 節 金 森 敦 子 浜 辺 祐 一	木 々 を 渡 る 風 江戸の女俳諧師「奥の細道」を行く 救命センターからの手紙	新 潮 社 晶 文 社 集 英 社
第48回 2000年	多 田 富 雄 鶴ヶ谷真一 八百板洋子	独 酌 余 滴 書を読んで羊を失う ソフィアの白いばら	朝 日 新 聞 社 白 水 社 福 音 館 書 店
第49回 2001年	青柳いづみこ 三宮麻由子 簾内敬司	青 柳 瑞 穂 の 生 涯 そっと耳を澄ませば 菅江真澄 みちのく漂流	新 潮 社 日 本 放 送 出 版 協 会 岩 波 書 店
第50回 2002年	デビットゾペティ 日 高 敏 隆 四方田犬彦	旅 日 記 春 の 数 え か た ソウルの風景	集 英 社 新 潮 社 岩 波 書 店
第51回 2003年	上 野 創 黒 川 鍾 信 古 庄 ゆ き 子	がんと向き合って 神楽坂ホン書き旅館 ここに生きる一村の家・村の暮らし	晶 文 社 日 本 放 送 出 版 協 会 ド メ ス 出 版
第52回 2004年	畠 山 重 篤 松 尾 文 夫 柳 澤 嘉 一 郎	日 本 <汽 水> 紀 行 銃を持つ民主主義 ヒトという生きもの	文 藝 春 秋 館 社 小 学 思 社 草 思 社
第53回 2005年	久我なつみ 滝 沢 荘 一 竹 山 恭 二	日本を愛したティファニー 名優・滝沢修と激動昭和 報道電報検閲秘史	河 出 書 房 新 社 新 風 舎 朝 日 新 聞 社
第54回 2006年	小 林 弘 忠 内 藤 初 穂 中 島 さ お り	逃亡「油山事件」戦犯告白録 星の王子の影とかたちと パリの女は産んでいる	毎 日 新 聞 社 筑 摩 書 房 社 ポ プ ラ 社
第55回 2007年	植 村 鞆 音 畑 中 良 輔 山 口 仲 美	歴史の教師 植村清二 オペラ歌手誕生物語 日本語の歴史	中 央 公 論 新 社 音 楽 之 友 社 岩 波 書 店
第56回 2008年	堤 未 果 山 本 一 生	ルポ 貧困大国アメリカ 恋と伯爵と大正デモクラシー	岩 波 書 店 日 本 経 済 新 聞 出 版 社
第57回 2009年	平 川 祐 弘 池 谷 薫	アーサー・ウェイリー 『源氏物語』の翻訳者 人間を撮る ドキュメンタリーがうまれる瞬間	白 水 社 平 凡 社
第58回 2010年	秋 尾 沙 戸 子	ワシントンハイツ GHQが東京に刻んだ戦後	新 潮 社

	氏 名	書 名	発 行 所
第59回 2011年	田中伸尚 内田洋子	大逆事件 死と生の群像 ジーノの家 イタリア10景	岩波書店 文藝春秋
第60回 2012年	井口隆史 小池光	安部磯雄の生涯 うたの動物記	早稲田大学出版部 日本経済新聞出版社
第61回 2013年	尾崎俊介	S先生のこと	新宿書房
第62回 2014年	後藤秀機 佐々木健一	天才と異才の日本科学史 辞書になった男	ミネルヴァ書房 文藝春秋
第63回 2015年	磯田道史	天災から日本史を読みなおす	中央公論新社
第64回 2016年	阿部菜穂子 温又柔 原彬久	チェリー・イングラム 台湾生まれ 日本語育ち 戦後政治の証言者たち	岩波書店 白水社 岩波書店
第65回 2017年	鳥海修 原田國男	文字を作る仕事 裁判の非情と人情	晶文社 岩波書店
第66回 2018年	内藤啓子 新井紀子	枕詞はサッチャン —照れやな詩人、父・飯田寛夫の人生 AI vs. 教科書が読めない子どもたち	新潮社 東洋経済新報社
第67回 2019年	ドリアン助川 小堀鷗一郎	線量計と奥の細道 死を生きた人びと 訪問診療医と355人の患者	幻戯書房 みすず書房
第68回 2020年	岩瀬達哉 上野誠	裁判官も人である 良心と組織の狭間で 万葉学者、墓をしまい母を送る	講談社 講談社
第69回 2021年	さだまさし 柳田由紀子	さだの辞書 宿無し弘文 スティーブ・ジョブズの禅僧	岩波書店 集英社インターナショナル
第70回 2022年	松本俊彦	誰がために医師はいる クスリとヒトの現代論	みすず書房
第71回 2023年	伊澤理江 吉原真里	黒い海 船は突然、深海へ消えた 親愛なるレニー レナード・バーンスタインと戦後日本の物語	講談社 アルテスパブリッシング

クラブ賞
のご支援

今回も次の各社からご寄付をいただきました。
小学館 新潮社 日本放送協会 NHK 出版



〈総会・贈呈式出欠ハガキより〉

コロナ騒ぎも下火になりましたが、今年の正月PCR検査で陽性と判定され、10日間ほど自宅に蟄居していました。ワクチンも6回接種しました。コロナ君、サヨナラ！

(中村 龍介)

肺炎再発で息苦しい私、足の根元骨折で動けない妻、それでも食欲旺盛、時折、原稿を書き明るく暮らしています。

(中村 政雄)

6月4、5、6日に高知県東高校及び岡豊高校にて講演会をして参りました。他にもオンライン講義・近日6月18日には野鳥の会の講義をいたします。近著①『フランツ・リスト深音の伝道師』②『センスオブナンダー』③『どっぶつえんできこえ

てきたよ』 (三宮麻由子)

エッセイ集を書いています。風邪をひいて了ったのか…熱があります。

(岸 恵子)

『唐宋伝奇集』(岩波文庫)から「邯鄲の夢」と「南柯の一夢」を朗読会で取り上げたい。風俗習慣、官職など耳慣れない熟語をどうこなすか。

(栗生 將信)



本年九月で満九十八歳になります。御陰様で家事はすべてひとりです。こなし、「頭の体操」にと「エッセイ」を執筆しています。ただ、疲れ易いのでいつまで続けられるでしょうか、不安がかかります。

(森本 貞子)

1月3日に満93歳になります。人工透析5年目で元気に過ごしております。『生きた喜び』に感謝の毎日です。

(渡辺 綱纒)

神代植物公園でガイドをしています。春バラは例年より2週間早く咲きました。秋バラは十月中旬です。

(八木 美雄)

この4月から、住まいのある千葉県市川市のミニコミ紙の記者に。週1回の発行。市川にもいろんな人がいたんだなあと改めて知る毎日だ。読売新聞に入社し、千葉支局に赴任したのが半世紀前。71歳にして振り出しに戻った。

(横田 弘幸)

7月に新著を出しました。『頭じゃロシアはわからない』で知るロシア』。出版社は辞書、教科書の大修館書店。堅い出版社ですが、思い切り柔らかい本にしていたいただきました。50年来温めていたテーマです。

(小林 和男)

今年94歳になりましたが、ますます元気です。長生きの秘訣は運動と食事。毎日歩くこと、毎日自分で食

事を作ることの二つを実践していません。
す。
(山本思外里)

今春100歳になり、「人生1000年時代」を実感しています。散歩や俳句を楽しむふつうの老境を過していますが、百を越えて見える景色をゆっくり味わいたいと思っています。
(杉溪 一言)

このほど富山房から『フリーグ・カローの日記』を発刊いたしました。一九九〇年頃数回メキシコに取材し、中央公論社から日本に初めてフリーグを紹介しましたが、以来念願だったフリーグの日記そのものの日本語版で彼女の絵がふんだんに入ったオールカラーの豪華本、解説は堀尾、お手にしていただけたら幸いです。
(堀尾眞紀子)

断捨離中、古い日記を発見しました。終戦時、海軍の将官だった義父のもの、昭和20年10月から1年間。紙はボロボロ、インクは薄れ。一念発起してパソコンに4ヶ月かけて写しとりました。戦犯、公職追放、婦人参政権、新円発行、銀座・梅田の

闇市、列車の混雑、遅延、本人のマッカーサー司令部への呼び出し等。当時13歳だった私も記憶にあるものもあります。やりとげて肩の荷は下りましたが、この始末、次世代に？考え中です。
(岡 佳津子)

特に変化はないです。
(松本 俊彦)



コロナ禍の数年間、矢橋丈吉というほぼ無名のアナキスト詩人の評伝のような本を一冊書きました。秋には上梓予定です。
(戸田 桂太)

70歳定年を機に始めたジョギング。今年4月郡山市、5月福島市のシティハーフマラソンに挑戦した。2都市ともかけだし記者時代赴

任し、取材でかけ巡った町。ここは良く来たな、いやここは全く変わったなと思いを巡らしながら、25度を超える暑さの中、何とか完走しました。
(高井 潔司)

歯の定期検査で医師が、「80歳で歯が1本も欠けていない人なんて、あまりいませんよ」と言っ。「そうですか」と喜んだ。覗き込んでから「歯みがきが下手ですから、感謝は親にしないさい」と言われた。これって、褒められたの？ 叱られた？
(野中 康行)

『日本語が消滅する』(幻冬舎新書)を刊行しました。結構大変でした。
(山口 仲美)

2冊目のエッセイ集『ことばの匂い』(幻冬舎)を出版することができ、山をひとつ越した感があります。また次の山を目指すべく、目標を定め、日々頑張っ行ってみたいと願っております。愛犬とともに毎朝1万歩歩いて健康を維持！
(竹本 祐子)

世界的なインフレに昨年来の超円安が重なって、海外での取材や会議

参加が困難になり、困り果ててい
す。(脇 祐三)

茶の間の壁に、天井までの本棚を
作り付けてもらった。夫が楽しそう
に自分の本を並べている。わたしの
『空穂全集』ほどの辺にするかと聞い
てくれた。本に見守られて歳を重ね
ていくのだろうか。(白井 和恵)

経済記者の卒論と違って平成五年
上梓した『凜の人 井上準之助』を、
いつでも読める企画」にのせて、電子
化すること。版元講談社のご配
慮に心より感謝しています。井上は
金解禁の当日、記者団の前で『遠図』
と揮毫したが、心は軍閥の予算編成
権への介入阻止でした。この井上の
思想は今に生きています。九十二歳
の感謝の日に。(秋田 博)

地元・府中市の生涯学習センター
の講座の仕事を追われています。十
月から「源氏物語を書く(小筆入門)」
を予定しています。林望先生の著書
に助けられています。(今野 耕作)
浪人になって三十年です。放浪の
生活、全く飽きない。見るもの、聞

くもの、読むもの、全く知らない、
経験のないことばかり。日々楽しい。
クラブ賞の著書も同様。7月に白内
障の手術をします。見えすぎよう
になって困るか。(菊澤 研一)

今年下半年からは、雑誌やネット
マンガへの寄稿などもできる限りし
ていきたいと思っています。(高木 徹)



10月16日(月)22時〜(NHK総合)
で4年ぶりに自らディレクターを担
当したNHKの特集番組『市民X…
謎の天才「サトシ・ナカモト」』が放
送されます。(佐々木健一)

韓国政府肝いりのアジア国際会議
に出席。会場である濟州島(チェジ

ユ)は、嘗て沖縄同様独立国であり、
太平洋戦争後は日本から韓国へ引き
揚げた人々が、同国人により何万人
と殺された悲しい歴史を持っていた
ことを知った。(大高 英昭)

川崎市内を流れる二ヶ領用水をた
ずねました。江戸時代初め頃完成の
農業用水路ですが、今は環境用水と
して市民の憩いの場として役立って
います。(坂本 弘道)

月刊『マネジメントスクエア』に
連載中の「旅の達人が見た世界観光
事情」から4冊目の本が出版されま
す。世界各地の32の旅の話が載った
『続 世界観光事情 まち歩きを楽しむ』
です。(秋山 秀二)

ナホトカ^{ひと}の女

道 ひろし

(一)

五番波止場にあなただを訪ね
元町通り ロシアンドール
潮風かおる 黄昏の街
外人墓地で 口づけしたの
そして ドラの響きが流れたの

(二) (三) 略

作曲寸前で全てパー。誰が唄ってくれますか。プーチン君。

(道脇 弘俊)

毎日二つの日課を欠かさず実行しています。①朝6時25分から10分間のテレビ体操。②英字紙「ジャパン・ニュース」紙のクロスワードパズル解き。

(深尾 凱子)

要介護3の夫の老老介護です。デイサービスも利用していますが、時間帯が合わず会議に参加できないこともあり、残念です。(松田 宣子)

(山川 静夫)

会員近況投稿のお願い
近況欄への投稿を歓迎いたします。エッセーや近況欄へのご感想などもお寄せください。字数は80字程度。

9月末まで

エッセーを募集しています

会員の皆さまのエッセーを9月末まで募集中です。電子版となった会報「冬」号(11月下旬発行予定)に掲載します。

応募エッセーは13年連続13回目企画です。電子版への模様替えは、印刷等の経費節減とともに、会報を広く社会に発信することを趣旨としております。応募要領は下記の通りです。できるだけ多くの会員の作品を紹介したいと存じます。とりわけ新しく入会された方々には自己紹介、近況報告の意味合いも兼ねて、ぜひご応募くださるようお願いいたします。なるべく多くの会員の作品を

発表するため、原則として2年(2回)連続の応募はご遠慮いただいております。

なお、当クラブのホームページで昨年の会報冬号のエッセーがお読みいただけます。

応募要領

- 一、テーマは自由です。
- 一、本文は1600字。
- 一、2000字以内の略歴を添付してください。
- 一、できるだけ、メール添付でお願いします。
- 一、応募原稿は原則としてご返却いたしません。

※詳しくはクラブ事務局まで。

2023年度定期総会

新会長に大村 智氏

予算、役員人事など採択

当クラブの2023年度定期総会は、6月26日、日本記者クラブでクラブ賞授賞式に先立って開かれ、新年度予算、同事業計画、役員人事など5議案が、提案通り賛成多数で可決、承認されました。会長に新たに大村智氏が就任、他に理事6氏、監事1氏の新任が認められたことで、新しい理事会の陣容が整いました。

2023年予算の総額は、前年比102万円減の730万円。かねて検討して来た正会員の会費引き上げは今年も見送り、法人も含め会費収入を前年同額と見込んでの緊縮予算としました。支出面では、クラブ室

賃貸料の引き下げが前年7月から実施されたことよって、賃借料が前年比99万円減となったほか、年度途中で事務局員の交代が予定されていることから事務局員の給料手当、福利厚生費が大幅に減額されました。

一方、昨年半額に削減されたクラブ賞金を60万円に戻したほか、IT化推進の趣旨で予備費を増額しました。また、昨年度83万円を計上した資産を取り崩しての繰入金は、今年度10万円に抑えることにしました。

前年度決算、本年度予算の詳細は、42、43ページに掲載しています。

なお、長年にわたり役員を務めら

れた遠藤利男代表理事・会長、秋岡伸彦専務理事、栗田亘、高村壽一、よしだみどり常務理事と、降幡賢一理事・事務局長、それに大高英昭監事が退任しました。これまでのご尽力に感謝申し上げます。

◇ 新しい役員名簿は、45ページに掲載しました。

新任の役員は次の通り。

(敬称略・五十音順)

代表理事・会長

大村 智 (天然物有機化学者、北

里大学特別荣誉教授。201

5年ノーベル生理学・医学賞

受賞)

理事

上野 誠 (国文学者、『万葉学者、

墓をしまい母を送る』で第68

回クラブ賞受賞)

海老沢小百合 (海老沢宏環境工房

取締役、エッセイスト)

佐々木健一 (NHKエデュケーシ

ヨナルでドキュメンタリー番

組を制作。『辞書になった男』

で第62回クラブ賞受賞)

並木きょう子(主婦の友編集部記

者を経て、フリーライター)

畠山重篤(養殖漁業家、エッセイ

スト。『日本〈汽水〉紀行』で

第52回クラブ賞受賞)

安嶋 明(日本未来キャピタル㈱

代表取締役社長。財界人文芸

誌『ほぼづゑ』編集世話人)

(注)堀尾眞紀子理事長は常務理事か

らの異動。秋山秀一、内藤啓子、

桃井恒和各常務理事はそれぞれ

理事からの異動です。

理事会報告

2022年度最終理事会および

2023年度第1回理事会

(23年6月26日)

- ・ 会員の現況報告
- ・ 役員人事について
- ・ 新入会員の承認
- ・ 本日の贈呈式について
- ・ 次期審査委員会委員長

「特別維持会費」ご寄付のお願い

クラブ総会に提案、承認されました通り、今年も会員の皆さまから「特別維持会費」のご寄付を募ります。できるだけ多くの方々のご協力をお願いします。

当クラブではクラブ賞選考、会報発行、例会開催などの活動を行っておりますが、資金運営は年ごとに苦しくなっております。クラブ収入は会員各位にお納めいただく会費のほか、主に新聞、テレビ、出版など各社からの支援に頼っています。しかし、マスコミ各社の経営環境は依然として厳しく、十分な支援は得にくくなりました。ここ数年、法人会員の退会が相次ぎ、現在は12社のみとなっております。

理事会では今回も会費引き上げを検討しましたが、やはり任意の寄付が妥当との結論になりました。「特別維持会費」ご寄付の呼びかけは2013年以降、9回目です。前回は62名の方々から計87万7千円の浄財が寄せられ、クラブ運営に大いに役立てられました。

一口1万円以上で、ご協力くださるようお願い申し上げます。もとよりクラブ役員、クラブ賞選考委員は無報酬ですが、なお一層、クラブ運営の経費節減に努めてまいります。

日本エッセイスト・クラブ

会 長 大村 智

理事会一同

日本エッセイスト・クラブ 会長就任にあたって

会長 大村 智

この度、理事会において、当クラブの会長に選任されましたので、一言ご挨拶申し上げます。

今年の三月のこと、遠藤利男会長を始め、栗田一巨常務理事、そして降幡賢一事務局長のお三方がわざわざ北里研究所までお越しください、会長候補者に推薦することが決まったので、了承して欲しいということでありました。即座に私は相応しくない者であることを語る述べたのでありましたが、お三方は、中々お引き取りになられず、私も返事に十日程の猶予をいただくこととして、受託の可否を熟慮することに致しました。

私の化学研究をなりわいとして来た半生を振り返りますと、これまで、大半は味も素っ気も

ない、紋切り型の文章をもって研究論文等を書き続けてきておりましたので、最近では味わいのある文章が書けるようになることを夢見て、「災害は忘れた頃にやってくる」という名言を残された物理学者の寺田寅彦や「雪は天から送られた手紙である」という含蓄のある言葉を残された中谷宇吉郎、そして数学者で、「科学における情緒の大切さ」を説いた岡潔といった尊敬する先達のエッセイを手本として、エッセイを書くことを修業しているところでありました。修業している身の者が当クラブの会長という話に戸惑いがありました。

この度、会長就任要請をいただいたところで、早速当クラブの歴史を学び直している中で、

科学者として、またエッセイストとしても、尊敬する中谷宇吉郎が当クラブの創立発起人の一人であることを知りました。それに深いご縁を覚え、私のような者でもこの身を何かに役立たせなければと、会長をお引き受けすることになりました。

今後、堀尾真紀子理事長を始め、役員の方々が当クラブの運営に尽力されることとなりますが、私も日本エッセイスト・クラブの発展に微力ではありますが、努めて参る所存でありますので、皆様のご支援とご協力をお願い致します。



略歴 おおむら・

さとし 1935
年山梨県韮崎市生まれ。天然物有機化学者、現在、北里大学特別荣誉教授。山梨大学学芸学部自然科学科卒、東京理科大学大学院理学研究科修士課程修了後、65年北里研究所入

所。米国ウエスレーヤン大学客員研究教授を経て、75年北里大学薬学部教授。北里研究所監事、同副所長を経て、90年北里研究所理事・所長。2007年北里大学名誉教授。15年、「線虫感染症の新しい治療法の発見」の業績で、ノーベル生理学・医学賞を受賞。同年文化勲章受章。著書に『人をつくる言葉』『人間の匂』（ともに毎日新聞出版）、『自然が答えを持っている』（潮出版社）、『ストックホルムへの廻り道 私の履歴書』（日本経済新聞出版社）、近著に『縁尋機妙』（致知出版社）。

事務局から

新会員の紹介

伊澤 理江（いざわ・りえ）氏

第71回日本エッセイスト・クラブ賞受賞者。詳細は13ページに。

吉原 真里（よしはら・まり）氏

第71回日本エッセイスト・クラブ賞受賞者。詳細は19ページに。

大堀 聰（おおほり・さとし）氏



横浜日独協会
常務理事。キャ
ノン（納入社後、
スイス、オラン
ダ、ドイツに駐

在。著書に『心の糧（戦時下の軽井沢）』、『第二次世界大戦下の欧州邦人』各3冊シリーズ。川崎市在住。

五阿弥宏安（ごあみ・ひろやす）氏

福島中央テレビ会長。読売新聞社論説委員、社会部長、制作局長、福島民友新聞社社長・編集主幹、福島



河野 博子（こうの・ひろこ）氏

中央テレビ社長を歴任。福島県郡山市在住。



地球環境戦略研究機関（IGES）シニアフェロ
ー、自然環境研究センター理事。読

売新聞社編集委員、大正大学客員教授を歴任。著書に『里地里山エネルギーを自立分散への挑戦』など。東京都在住。

広岡 勲（ひろおか・いさお）氏



江戸川大学教授、読売巨人軍アドバイザー。

報知新聞社に入社後、米国球団広報に従事。2013年WBC日本代表統括広報、2021年東京オリンピック開会式の演出に従事。著書に『ヤンキース広報術』『負けない心』など。東京都在住。

丸山 伸一（まるやま・しんいち）氏



報知新聞社顧問。読売新聞社論説委員を経て、報知新聞社編集局長、同常務、報知新聞社社長、同会長を歴任。著書に『ドキュメント弁護士』『ドキュメント裁判官』。東京都在住。

維持会費ご寄付のお礼

2023年4月から7月までに、次の会員からご寄付をいただきました。ご芳志のほど心からお礼申し上げます。（順不同・敬称略）

藤原 作弥	齋藤健次郎
鈴木 博	遠藤 利男
脇 祐三	坂口 和子
岸 恵子	鶴ヶ谷真一
田和 潤子	佐藤 幸子
森本 貞子	秋岡 伸彦
野見山曉治	竹本 祐子
下村 満子	大村 智
澤地 久枝	縫田 暉子

懇話会の発足

コロナ禍のため2020年3月を最後に中止が続いていた例会に代えて、今年度から「懇話会」という新たな集まりをスタートさせます。

懇話会は、原則として春・秋・冬の年3回開催。以前の例会と同様、会員のどなたかに各回ゲスト・スピーカーになつていただきますが、会場はエッセイスト・クラブのクラブ室に限定せず、必要に応じて他の広い会場に場所を移して開くことも考えています。

スタートの今年度は、9月26日(火)に大村智新会長の講演会と

して、北里大学白金キャンパスの大村記念ホールで第1回を行います。ノーベル賞受賞者から話を聞ける貴重な機会でもありますので、この懇話会は、会員だけでなく、会員の家族や友人も聴講できるような形にいたします。

また、そのあとは12月に阿川佐和子さん、来年3月に大宅映子さん(いずれも会員)をそれぞれゲスト・スピーカーに日本記者クラブ大会議室での開催を予定しています。

これまで例会には出たことがないという方も少なくないようですが、会員同士の交流・情報交換の場として、懇話会へ皆様の幅広い参加をお待ちしています。なお、開催日時や会場など詳細については、そのつど事務局からお知らせします。

大村さん、阿川さん、大宅さんが

ゲスト・スピーカー

会員からの寄贈著書

大村 智氏著『縁尋機妙 よき人、

よき言葉との出逢いが
わが人生を導いてきた』

佐藤幸子氏著『縁』

竹本祐子氏著『ことばの匂い』

秋田 博氏著『義拳「本能寺への道」

歴史画にみる明智一族
内田青虹の世界』

(4月から7月下旬まで)

贈呈式をYouTubeに

秋山秀一常務理事が贈呈式の模様を動画にしました。YouTubeを検索し、その中で次のタイトルを検索すると見られます。「第71回日本エッセイスト・クラブ賞贈呈式にて①」③

2022年度 会 計 報 告

自2022年4月1日至2023年3月31日

支 出 の 部			収 入 の 部		
勘定科目	摘 要	金 額	勘定科目	摘 要	金 額
給料手当	事務局職員手当	2,040,000	クラブ会費	正会員・法人会員	4,960,000
郵 送 費	郵 送 費	285,808	総会等会費	総会・例会会費	0
印 刷 費	会報他印刷費	758,120	寄付金収入	特別維持会費他	1,647,000
会 議 費	総会等会合費	186,322	雑 収 入	会報広告代他	649
理事・例会費	理事会・例会費用	13,633	受取利息	定期・普通・利息	22
クラブ賞賛金	クラブ賞・賞金	300,000	小 計		6,607,671
函 書 費	クラブ賞審査図書	109,472	監 修 料		0
交 通 費	通勤交通費他	137,100	印 税 収 入		0
交際・慶弔費	慶 弔 費	6,251	還付所得税		0
通 信 費	電 話 料	89,421	小 計		0
手 数 料	振替貯金手数料	67,322	繰 入 金		830,000
賃 借 料	クラブ借室料	2,755,500			
光 熱 費	電気・水道料	180,844			
事 務 費	事務用消耗品費	37,265			
備 品 費	コピーリース代	11,880			
租 税 公 課	都民税・源泉税	84,480			
福利厚生費	社会保険料等補助	240,000			
雑 費		9,731			
予 備 費		180,900			
小 計		7,494,049			
欠 損 金		▲56,378			
合 計		7,437,671	合 計		7,437,671

<注> 予め剰余金から83万円を繰り入れているため、実質的な赤字は88万円余となる。

貸 借 対 照 表

2023年3月31日現在

資 産 の 部			負 債 及 び 純 資 産 の 部		
勘定科目	摘 要	金 額	勘定科目	摘 要	金 額
現 金	手 許 残 高	13,875	基本財産		5,100,000
普通預金	みずほ銀行A	600,396	繰越剰余金		51,368
普通預金	みずほ銀行B	0	預 り 金		15,000
普通預金	みずほ銀行法人	1,000,000	当期欠損金		▲886,378
普通預金	ゆうちょ銀行	1,719			
定期預金	みずほ銀行	0			
長期預け金		2,664,000			
合 計		4,279,990	合 計		4,279,990

2023年5月15日

監 事 大高 英昭 監 事 今野 耕作

2023年度予算

収 入

勘定科目	本年度予算(円)	前年度予算(円)	備 考
正会員会費	3,000,000	3,000,000	会費収入
法人会費	2,200,000	2,200,000	12社
小 計	5,200,000	5,200,000	
総会等会費	159,000	179,000	総会・贈呈式、例会等会費
寄付金収入	1,800,000	2,000,000	クラブ賞賛助金、維持会費等
雑収入	40,000	110,000	会報広告代
受取利息	1,000	1,000	みずほ銀行（定期・普通預金）
小 計	2,000,000	2,290,000	
監修料	0	0	
印税収入	0	0	
還付所得税	0	0	
小 計	0	0	
繰入金	100,000	830,000	
収入合計	7,300,000	8,320,000	

支 出

勘定科目	本年度予算(円)	前年度予算(円)	備 考
給料手当	1,620,000	2,040,000	事務局員1名
郵送費	340,000	340,000	会合通知、会報、図書等の送付代
印刷費	900,000	800,000	会報（冊子2回）、封筒等
会議費	210,000	210,000	総会・贈呈式会合費等
理事・例会費	40,000	40,000	会合費
クラブ賞賛金	600,000	300,000	賞金総額
図書費	120,000	100,000	クラブ賞審査図書費
交通費	110,000	140,000	事務局員通勤費等
交際・慶弔費	10,000	10,000	弔電等
通信費	110,000	110,000	電話・FAX・インターネット料金
手数料	75,000	75,000	郵便払込料金（会費）、振込手数料
賃借料	2,510,000	3,500,000	クラブ室賃借料、共益費等
光熱費	180,000	140,000	電気、水道代
事務費	80,000	80,000	事務用品、コピートナー
備品費	100,000	15,000	コピー再リース代
租税公課	85,000	80,000	法人都民税等
福利厚生費	0	240,000	社会保険料等補助
雑費	10,000	10,000	日用品
予備費	200,000	90,000	
支出合計	7,300,000	8,320,000	

一般社団法人日本エッセイスト・クラブ定款

(抜粋)

第1章 総 則

(名称)

第1条 この法人は、一般社団法人日本エッセイスト・クラブと称する。

(目的)

第3条 当法人は、エッセイストの親睦をはかり、共通の利益を擁護し、言論の自由を主張し、文化と平和に貢献することを目的とし、国際文化団体との連携を期する。

(事業)

第4条 当法人は前条の目的を達するために下記の事業を行う。

1. 会員の相互協力
2. 国際文化交流
3. 研究調査の発表並びに講演、見学
4. 会員相互の親睦と相互扶助
5. クラブ賞の選定、その他必要な一切の事業

第2章 会 員

(種別)

第6条 当法人の会員は、次の5種とし、正会員をもって一般社団法人及び一般財団法人に関する法律（以下「一般法人法」

という。）上の社員とする。

- (1) 正会員 当法人の目的に賛同して入会した個人
- (2) 法人会員 当法人の目的に賛同して入会した法人
- (3) 賛助会員 当法人の事業を賛助するため入会した個人又は団体
- (4) 名誉会員 当法人に特に功労があり、理事会で推薦され、会員総会で承認された者
- (5) 特別会員 当法人の正会員として20年以上継続した者又は当法人が主催するクラブ賞を受賞した者が満85歳になったとき

(入会)

第7条 正会員として入会しようとする者は、正会員2名以上の推薦を得、申込書に会費を添えて理事会の承認を受けなければならない。法人会員、賛助会員は理事会が推薦する。

第3章 会員総会

(構成)

第13条 会員総会は、すべての正会員をもって構成する。

2 前項の会員総会をもって一般法人法上の社員総会とする。
(会員総会)

第14条 当法人の会員総会は、定時会員総会及び臨時会員総会とし、

定時会員総会は、毎事業年度の終了後3か月以内に開催し、臨時会員総会は必要に応じて開催する。全会員の5分の1以上が書面により請求したとき、または理事会が会議の目的事項を示して請求したときは、会長は臨時総会を招集し

なければならぬ。

第4章 役員等

(員数)

第20条

当法人に次の役員を置く。

- (1) 理事 15名以上25名以内
 - (2) 監事 2名以上
- 2 理事のうち、会長1名、理事長1名、専務理事1名、常務理事若干名、事務局長1名を推薦して理事会の決議によつて、理事の中から定める。
- 3 会長及び理事長は、当法人を代表し、一般法人法上の代表理事とする。

第5章 理事会

(権限)

第28条

理事会は、次の職務を行う。

- (1) 当法人の業務執行の決定
- (2) 理事の職務の執行の監督
- (3) 会長、理事長、専務理事及び常務理事の選定及び解職

役員名簿

会長	大村 智		
理事長	堀尾真紀子		
専務理事	(空 席)		
常務理事	秋山 秀一	内藤啓子	中丸美繪
	桃井恒和	安 鳴 明	
理 事	上野 誠	梅津時比古	海老沢小百合
	佐々木健一	戸田 桂太	並木きょう子
	畠山重篤	原田 國男	藤原作弥
	松田宣子		
監 事	今野耕作	杉田定大	
事務局長(兼)	海老沢小百合		
名誉会長	村尾清一		

* * *

第8章 附 則 (略)

第6章 計 算 (略)

第7章 清 算 (略)

会 員 名

(2023年7月1日現在 251名)

あ行

阿川 佐和子	阿部 菜穂子	青木 賢児	秋尾 沙戸子	秋岡 伸彦
秋田 博	秋山 秀一	芥川 喜好	浅川 港	甘里 君香
足立 則夫	有馬 真喜子	五十嵐 佳子	井上 樹彦	池内 紀昭
池谷 薫	伊野 啓三郎	飯塚 恆雄	飯塚 浩彦	市川 桃子
市田 隆文	稲葉 延雄	猪熊 建夫	岩瀬 達哉	上田 篤
上野 創	上野 誠	白井 和恵	鶉飼 哲夫	内池 正名
内田 洋子	梅津 時比古	浦田 憲治	海老沢 小百合	榎本 好宏
遠藤 利男	小澤 秀雄	小曾 戸明子	尾崎 左永子	尾崎 俊介
及川 直志	大井 玄	大城 浩詩	大平 常元	大高 英昭
大堀 聰	大谷 克弥	大村 智	大宅 映子	太田 愛人
岡 佳津子	岡田 恵美子	奥山 俊宏		

か行

加固 康二	加藤 恭子	加藤 貞仁	勝方 信一	金井 辰樹
金森 敦子	金子 光美	亀田 泰武	軽部 謙介	河合 弘之
川田 志明	川良 浩和	菅野 光公	城山 邦紀	儀同 保
菊澤 研一	岸 恵子	岸本 康	北村 行孝	久我 なつみ
久谷 與四郎	栗生 将信	栗田 亘	黒川 鍾信	小池 光
五阿弥 宏安	小池 英夫	小泉 清	小谷 瑞穂子	小林 和男
児島 宏子	後藤 秀機	河野 博子	今野 耕作	紺野 猷邦

さ行

さだまさし	佐々木 健一	佐々木 卓	佐々木 満里子	佐田 智子
佐藤 きむ	佐藤 幸子	佐橋 慶女	佐保田 芳訓	斎藤 勇
齋藤 健	齋藤 健次郎	齋藤 博康	柴門 ふみ	坂口 和子
坂本 政謙	坂本 弘道	澤口 たまみ	澤地 久枝	三宮 麻由子
志田 英泉子	志村 ふくみ	塩谷 靖子	清水 陽太郎	下重 暁子
下村 満子	杉江 弘	杉田 定大	杉溪 一言	杉戸 大作
杉山 武子	鈴木 章一	鈴木 博	砂原 和雄	

た行

田中 トモミ	田中 伸尚	田中 秀一	田沼 敦子	田谷 麗子
田和 潤子	高井 潔司	高木 徹	高階 經和	高村 壽一

竹内 一正	竹中 淑子	竹本 祐子	武本 宏一	谷地 快一
谷村 鯛夢	俵 万智	柘野 健次	辻 由美	堤 未果
鶴ヶ谷真一	D・ゾペティ	出久根達郎	ドリアン助川	戸田 桂太
戸田 淳子	鳥羽欽一郎	東畑 朝子	徳田 正幸	富永 孝子
富山 和子	鳥海 修			

な行

内藤 啓子	中島さおり	中野 利子	中丸 美繪	中村 史郎
中村 政雄	中村 龍介	長井 好弘	長田 亮一	長友佐波子
長野 安恒	長屋 龍人	並木きょう子	二宮 正之	蜷川 真夫
縫田 嘩子	野中 康行			

は行

長谷部 剛	葉山美知子	羽中田 昌	馬場 錬成	畠山 重篤
濱邊 祐一	原 彬久	原田 國男	林 望	樋口 恵子
広岡 勲	廣野 眞一	深尾 凱子	福田 章	福原 義春
藤原 勇彦	藤原 作弥	藤原 房子	藤原 正彦	船木 拓生
降幡 賢一	古川 洽次	古川 浩	穂苅 正臣	細川 俊夫
堀尾眞紀子				

ま行

前田 浩智	牧 久	牧村健一郎	又吉 國雄	松田 宣子
松本 仁一	松本 俊彦	丸山 伸一	萬年 浩雄	三島 利徳
水谷 亨	道脇 弘俊	南 砂	宮本 倫好	村尾 清一
望月 照彦	桃井 恒和	森 小夜子	森 孝之	森 武生
森本 貞子	森本 雍子	森脇 逸男		

や行

八百板洋子	八木 美雄	安嶋 明	柳生 尚志	柳澤嘉一郎
柳澤 桂子	柳川 時夫	柳田由紀子	山川 静夫	山形 孝夫
山口 寿一	山口 伸美	山下 健	山藤 章二	山室 寛之
山本 一生	山本思外里	よしだみどり	養老 孟司	横田憲一郎
横田 弘幸	横山 昭作	吉岡 純子	吉野源太郎	吉原 賢二
吉行 和子				

わ行

若林 滋	脇 祐三	渡辺 綱纜	渡辺美佐子	渡邊 満子
------	------	-------	-------	-------

法人会員（順不同）

朝日新聞社	岩波書店
毎日新聞社	講談社
読売新聞社	集英社
産業経済新聞社	
日本経済新聞社	
中日新聞社	
共同通信社	
日本放送協会	
TBS テレビ	

日本エッセイスト・クラブ事務局



日本エッセイスト・クラブ

会報 2023 秋 (No.75-1)

2023年8月25日 発行

発行人 大村 智

発行所 一般社団法人 日本エッセイスト・クラブ

東京都港区新橋1-18-2

明宏ビル別館6階 〒105-0004

電話 03(3502)7287

FAX 03(3502)7288

ホームページ <http://essayistclub.jp/>

Eメール info@essayistclub.jp

印刷所 (株)TBSシロワメディア

re
CLUB